

協同組合日専連仙台会初代理事長

## 三原 庄太

困難を連携と発展の糧に  
仙台のにぎわいを築く

【みはら しょうた】

- 
- 1890(明治23)年 仙台市に生まれる
  - 1916(大正5)年 時計販売、修理を営む三原本店を  
継ぐ
  - 1935(昭和10)年 仙台専門店会会長
  - 1952(昭和27)年 協同組合仙台専門店会理事長
  - 1957(昭和32)年 協同組合日専連仙台会初代理事長
  - 1973(昭和48)年 2月18日死去

## 百貨店進出反対運動を連携のきっかけに

一九三〇（昭和五）年四月一日、三原庄太は嬉しくない知らせを耳にした。

その日は、同日が仙台の「商工記念日」に制定されたのを祝う記念行事があり町はにぎわっていた。不景気の最中だけに三原は久しぶりに心が晴れる思いがしたが、かねてよりの心配が現実になることを聞き、明るい表情も一瞬にして曇った。

「仙台に三越がやってくるらしい」

噂は以前からあり、一部の商店主たちは進出阻止に動いていたので対応は早かった。わずか一〇日後に「中央百貨店進出反対同盟大会」を開催し、三越の進出反対を決議、三原は加盟する三〇の小売業組合および有志の代表になり、反対運動の先頭に立った。それから二ヶ月も経たないうちに、今度は大町の藤崎呉服店が商号の変更を発表。百貨店への脱皮を宣言した。三原の二軒隣の大店の大転換である。東京では小売業の総売上の五割余りを百貨店が占め、年々、中小小売業を圧迫していたが、いよいよ仙台にも百貨店危機が迫っていた。

三原らは、三越が進出を撤回するよう嘆願しながら、容れられない場合は独自に百貨店を創設するとした。

しかし長引く不況のせいで三越出店は進展せず、反対運動をきっかけに結束するはずの地元商店の連携も進まなかった。新聞は「沈滞せる仙台の商店会」として、三越

出店が進まないことを理由に連携を怠り、商業を活性させない地元小売店を批判した。反対運動には一理あるが、不況を乗り越えるために自らも改善すべきはあると言うのである。

新聞の指摘通りこのころの商店会は、百貨店に対抗するもの一枚岩ではなかった。三原らは、「百貨市場」と名付けた連鎖型専門店に対抗したが、一方で別のグループは独自の合同マーケットを催していた。百貨店に対抗する矢は、それを射抜く前にちぐはぐな指向から力が削がれていたのである。

昭和七年、百貨店問題は、百貨店法の成立をめぐり中小小売店と百貨店の対立がさらに激化した。東京では百貨店進出を阻止する全国大会が開かれ、三原は仙台からの代表団の一員として出席した。仙台での反対運動は、運動の全国的な広がりや世論に後押しされ、大会直後に「全仙台商店連盟」の設立につながった。百貨店に対抗する一枚岩の体制がようやくできたのである。

三原らはこうした進出阻止活動の一方で、加盟店の連携と商いの研鑽を進めた。阻止運動より自己改造へ。連盟設立前にそうした課題が話し合われたように、自省を忘れず魅力ある商店づくりに努めた。二年余り前の三越進出反対運動から始まった店主の活動は、連携と改善を促すようになったのだ。

昭和七年十一月、藤崎は百貨店となり、翌年四月、三越仙台店が開店した。反対運動は実らなかったが、活動は仙台商人の結束を生むきっかけになり、発展の足がかり

を築いた。そしてその流れは、仙台専門店会（現日専連仙台会）の誕生につながっていく。

## 日専連大会で仙台七夕を披露

三原らが三越出店反対を唱えた年、岡山市に日専連運動の嚆矢となる岡山専門店会が誕生した。

「一業一店による分散型百貨店形態の専門店会」と呼ばれた会は、特定マーケットをターゲットとする専門店が連携し、商機会を最大化すべく生まれたもので、大正一〇年に一二人の青年有志の活動から始まった。それが全国に広まった背景には、仙台的例からわかるように百貨店の台頭があり、専門店が対抗するための連携アイデアとして各地で歓迎された。

その日専連活動の伝道者が仙台にやってきたのは昭和一〇年六月で、同時に仙台専門店会が発足した。百貨店への対抗策に頭を悩ませていた三原らは、かねてより運動に興味を持っており、待ちに待った発足だった。設立時の参加店は二四店で、三原は初代会長に就いた。

仙台での専門店会設立は、発祥の岡山を除けば全国四番目である。その後全国で設立が相次ぎ、昭和一一年一〇月に全日本専門店会連盟（以下日専連）を結成、翌年の

五月には岡山で第一回の全国大会を開催した。

全国大会の目的は日専連の活動を広めることで、当初から会議以外に『せんもん祭り』の開催を予定していた。ただの会議では注目されず、お祭りだけでは有益と言えない。活動を充実させ、広く一般に知らせるために考えられたのが、加盟専門店会各地の祭りやお国自慢を揃え、行進を行なうことだった。

その開催意図について当時の案内では、「大衆性があるので全国でラジオ放送や新聞報道、ニュース映画上映が期待できる」とした上で、「数万金を投じるよりも各地専門店会の宣伝となる」としている。広告費をかけずに媒体報道を誘うパブリシティ戦略を採ったのである。

第一回大会の『せんもん祭り』で仙台専門店会は、徳島の阿波踊り、小倉の祇園囃子などとともに七夕踊りを披露し、山車いっぱいに吹き流しを飾った。仙台七夕の華やかさは、今ほど全国に知られていなかっただけに、目論見通り仙台の名を広く知らしめた。

大会では、翌年の第二回大会の開催地が決められたが、三原は誘致に熱意を注いだ。実現すればさらに仙台の魅力が知られるし、百貨店問題で揺れる地元商店会に勇気を与え、景気回復にもつながる。誘致合戦は激しかったが、三原の情熱が勝ったのか見事、開催を勝ち取った。

大会後三原は、感想を記した文で成果を述べながら、日専連の協同活動の有益性を

語っている。

「時代は協同の力を必要とする。地方に蟠踞して独善を誇つてのみ居ては視界が狭くなる。毎年出席して親しく知識を交換し、結束を強固にして難関を克服することに日専連の目的と収穫がある」

昭和一三年五月、日専連第二回大会は仙台で行われた。しかし、前年大会の直後に日中戦争が勃発。さらに開催の数日前に国家総動員法が施行されるなど戦争は目前に迫っていた。前回に増して仙台を華やかに宣伝するはずの『せんもん祭り』は中止され、代わりに戦勝祈願の行進が行われた。新聞にあるように大会は、「非常時局にふさわしい緊張と盛況」が相半ばし、異様な雰囲気に含まれた。

## 無一文からの再出発

小売業の活性と連携のため、三原らが情熱を注いだ日専連活動は戦争によって阻まれた。昭和一五年の第四回大会を最後に日専連は解散したのだ。戦時下での運動を模索する動きもあったが、物も人手もない状況では商業の発展など望むべくもなかった。

三原は仙台商工会議所の副会頭を務めていたが、戦時中は政府機関としての業務に専念した。齢五〇を過ぎ、本来なら家業や組合活動に精を出すころだが、店には売る時計もなく、修理を頼みに来る客もいなかった。

昭和二〇年七月一〇日。時計の針がちょうど零時を指したところ、仙台上空に米軍機が襲来した。警察の記録に「夕立がトタン屋根をたたくような音を立てて」とあるように、空襲は雨のような焼夷弾から始まり、二時間に渡る波状攻撃で中心市街地のほとんどもを焼き尽くした。県庁、市役所はかるうじて類焼を免れたが、それ以外はほぼ焼けた。

この空襲で三原は自宅兼店舗を失った。屋上に時計塔がそびえ、御譜代町・大町のシンボルとして親しまれた自慢の店だった。直撃した焼夷弾は外壁の一部を残すべてを焼いた。三原いわく、残ったのはのれんだけで、文字通り無一文になった。

昭和二二年、父の代から始まった三原本店は創業六〇年を迎えた。三原は一〇坪ほどのバラックの店を建て商売を再スタートさせた。売ったのは時計ではなく漆器だったが、飛ぶように売れ生活を支えた。

この年の八月五日、天皇陛下が仙台を行幸された。民主組織として生まれ変わった仙台商工会議所は、街に七夕を飾りお迎えることを市内商店会に呼びかけた。物資不足のなか、一千本もの吹き流しが街を彩った。そしてこれが七夕復活のきっかけとなり、現在の仙台七夕祭りの原型になったという。仙台七夕は復興のシンボルだったのだ。

家業を立て直すことに精一杯だった三原も、ここへ来て商店街全体を見渡す余裕が生まれた。街の復興も進み、青葉通、東二番丁通、広瀬通など現在の街並みができた。

戦後の混乱が治まり、街と商売にも秩序が生まれた。そして昭和二四年、中小企業等協同組合法が制定され、民主的な組合活動の基盤が再び整った。

昭和二五年、日専連は発祥の地、岡山で再結成した。このとき、全国三三の地方会が参加したが、そこに仙台の名はない。三原らは、「すべての客は平等で、店は客のためにある」とする『真商道』を基本理念に専門店会復活と日専連への再加盟を計画したが、市内商店会の協同的繁栄を優先すべきとの理由で日専連再結成時の参加を見送った。それは出遅れや、戦争で組合活動の熱意が失われたということではなく、足場をしっかりと固め、結束を高めるための助走期間であったといえる。

## 高度経済成長を告げた仙台大会

昭和二七年七月、新生・仙台専門店会は組合法の一部改正を受け誕生した。そして四〇名の組合員は、三原をふたたびトップに選んだ。

これに先立ち仙台専門店会は日専連に再加盟しているが、連盟は再結成から二年で五〇を超える地方会を擁し、全国大会に三〇〇人以上を集める団体に成長していた。復活した『せんもん祭り』も催しの幅を広げ、宣伝効果をさらに強くしていた。もはや日専連大会は商業界の一組合の催しではなく、地域振興に影響力を持つイベントになっていたのである。



仙台専門店会でも再結成と同時に、全国大会の再誘致を計画した。

「第二回大会は事変勃発で、思うことの半分もできなかった。そのお詫びと名誉挽回をしたい」

三原は誘致への思いを語ったが、それは組合員や地元経済界、ひいては市民の総意であった。前回開催の目的は、百貨店問題に立ち向かうための商店会の連携と地域活性化だったが、今回は戦災からの復興も加わり、多くの関心を呼んでいたのである。しかし大会を復興の起爆剤にしようとするのはどの地方会も同じで、誘致合戦は熾烈を極めた。

昭和二九年の第九回鹿児島大会で、仙台専門店会は再び七夕を持ち込み『せんもん祭り』を盛り上げた。大会には仙台市長も駆け付け誘致活動を行なった。日専連大会が地方振興にいかに関心をもち、持っていたかが分かる。

四地方会による舌戦にまで発展した招致合戦により、仙台大会は昭和三二年の開催が決まった。もっと早い開催も期待したが、戦前の百貨店問題の迷走や戦中戦後の屈辱、貧困、混乱を思えば著しい進歩で、それは復興の先の発展も実感させた。かつて三原は、「時代は協同の力を必要とする」としたが、言葉通り、戦争を乗り越えた街は、新しい協同で生まれ変わろうとしていた。

昭和三二年の日専連仙台大会は、五月七日から五日間に渡って行なわれた。クライマックスの『せんもん祭り』パレードにはたくさんの市民が押し寄せ、各会のお国自

慢を楽しんだ。前年の経済白書の「もはや戦後ではない」の言葉が象徴するように大会は新しい時代の到来を告げた。

戦後から高度経済成長時代へ。わずかな間に商業を取り巻く環境は大きく変化した。前年には百貨店法が制定され、仙台専門店会がクレジット事業に取り組むものところからである。成長とともに会の進む先には新たな課題も予測された。

時は進む。組合設立の種を蒔き、二〇年余りをその成長のために尽くした三原は、昭和三三年、さらなる発展の願いを込め、後進にバトンを渡した。